



横綱昇進 (上)

起点場所は11勝4敗

貴景勝の綱取り初場所はいきなり黒星発進となった。白鵬と鶴竜の両横綱不在で、新横綱誕生に向け、追い風の状況がある。一方、コロナ感染の白鵬ら16関取休場の異常事態。場所の途中打ち切りも憂慮される中、今後の挽回が注目される。

柏戸は昭和36(1961)年9月の秋場所後、大鵬と同時の横綱昇進となった。大関昇進後7場所を経てのものだった。横綱昇進の現在の条件としては「大関として2場所連続優勝かそれに準じる成績」という基準が知られる。貴景勝は11月場所の優勝(13勝2敗)があるから、条件を満たしての堂々の挑戦である。



柏戸に戻れば起点の名古屋(7月)は11勝4敗に終わった。普通ならば翌場所

「綱うんぬん」が言われることはない。その秋場所は12勝3敗。大鵬、明武谷と優勝決定・巴戦に持ち込まれた。柏戸は最初明武谷を寄り切って、続く大鵬戦は右ノド輪から攻めに攻め、最後はモロ差しになり、ほとんど勝ったも同然だった。しかし土俵際で逆転のうっちゃりを食らってしまった。大鵬は続く明武谷戦を

敗戦も口調サバサバ

優勝決定戦後、柏戸は「負けたから仕方ない。次の場所またやり直すだけ」と話した。大鵬の綱昇進を横目に悔しさを押し殺したのかと思ったが、口調は普段同様、サバサバしたものだった。このあっさりしたこだわりのなさが柏戸の魅力であり物足りなさでもあった。だが気持ちを切り替えた本人とは別に同時昇進の機運がドンドン高まっていくのである。

栃錦引退後、若乃花も衰えが隠せず、朝潮も下半身のケガで安定的な成績が残せない。新横綱待望論は盛

花籠理事と蝶ネクタイ姿の春日野親方(左)が使者として伊勢ノ海部屋を訪れた

り上がっていた。大鵬は文句なしだが柏戸は強いが土俵際で腰高を突かれての逆転負けなど取りこぼしがあった。大鵬との優勝決定戦がまさしくそうだった。ただ「柏戸時代」という言葉はすでに一人歩きしていた。整わない白星の数をどう捉えるか。ここで後押しとなったのが大関昇進時と同じ理由。一門別対戦制度だった。

孤軍奮闘評価され

柏戸は伊勢ノ海部屋という小部屋所属の上、時津風一門に居ながら、歴史的背景として系統がなかったことで同門の大関・北葉山(時津風)と対戦があるなど、

実家近くにアメダス

○:正月明けの豪雪で柏



戸記念館前の柏戸銅像は顔までがすっかり「真っ白」に隠れた写真。気象庁の

番付上位陣とは総当たりの孤軍奮闘状態だった。一方、二所ノ関部屋に所属、そのまま二所ノ関一門に居る大鵬は部屋は違っても幕内上位の若乃花(花籠)、琴ヶ浜(佐渡ヶ嶽)、若三杉(後の大豪、花籠)らとの直接対決がなかった。

時代の空気も同時昇進

横綱審議委員会の酒井忠正委員長は柏戸が大鵬との14日目の本割に勝ち、優勝決定戦も勝ちに等しい内容だったことを挙げ「柏戸は大鵬と同等の力がある。全体的に上位力士と対戦するのだから、星の数は配慮しなければならぬ」と語り、

敬称略 富樫 嘉美

横審の総意として相撲協会に同時昇進を提言した。これはマスコミを含め、時代の空気を感じてのものだった。ちなみに大相撲が部屋別総当たり制になるのは昭和40年初場所。3年後のことだった。

9月27日、柏戸は花籠理事(元幕内大ノ海)と春日野検査役(現審判委員) 元横綱栃錦IIの横綱昇進の使者を伊勢ノ海部屋に迎えた。伝達に対しての口上は平成時代に一時「四字熟語」がはやった時期もあったが、柏戸はシンプルなものだった。

アメダス観測所は鶴岡市に4カ所、うち「櫛引」は柏戸の実家がある桂荒俣地区(標高333m)にある。例年の5倍の積雪を記録した今年5月5日は101cmを観測した。他の3観測所は市街地の「錦町」、温海地域の「鼠ヶ関」と朝日地域「荒沢」。

毎週火曜日付に掲載